

全般季節予報支援資料 暖候期予報 2017年3月24日

予報期間：2017年4月～2017年8月 気象庁地球環境・海洋部

1. 今回の予測資料と考え方

前回予報根拠を見え消し（削除部分は取り消し線、追加部分はアンダーライン）で記述。項目ごとの囲みには、前回と今回の予想資料との差などを記載する。

- ① 熱帯の海面水温は、予報期間内は~~エルニーニョ現象もラニーニャ現象も発生していない~~平常の状態が続く可能性が高い（2月10日発表のエルニーニョ監視速報を参照）エルニーニョ現象が発生する可能性もあるが(40%)、平常の状態が続く可能性の方がより高い(60%)（3月10日発表のエルニーニョ監視速報を参照）、太平洋西部では海面水温が高い状態が続く見込み。

↑エルニーニョ現象の発生確率が前回予報に比べて高くなったが、日本付近の天候に大きく関係する太平洋西部の海面水温が高いことは前回と同様。

- ② 熱帯で太平洋西部の海面水温が高いため、インドシナ半島からフィリピン付近では、対流活動が活発な予測となっている。

↑前回と同様。

- ③ インドシナ半島からフィリピン付近にかけて対流活動が活発な影響で、中緯度帯では大陸東部から日本付近で高度が高くなり、偏西風は北偏する予測となっている。このため、チベット高気圧は大陸東部から日本付近にかけて強い。また、850hPa 気温も大陸東部から日本付近は高温が予測されている。

↑前回と同様。

- ④ インドシナ半島からフィリピン付近にかけて熱帯の対流活動が活発な影響で、太平洋高気圧は、北への張り出しも強いと見込む（PJ パターン）。

↑海面気圧偏差では、本州以南では正偏差が見られ、日本付近の太平洋高気圧の張り出しは、日本の南東海上を中心に強い状況が続く一方、北海道以北では負偏差がみられ、北への張り出しは弱くなった。しかし、再予報での日本付近の海面気圧の予測精度は低く、フィリピン付近の対流活動を考慮して、前回と同様に、太平洋高気圧は、北への張り出しも強いと見込む。

- ⑤ オホーツク海高気圧の出現は平年並程度を見込む。

↑オホーツク海付近の海面気圧は負偏差となり、オホーツク海高気圧が発生しにくい気圧配置となったが、日本付近の海面気圧の予測精度は低く、前回と同様に、オホーツク海高気圧の出現は平年並程度を見込む。

- ⑥ 地球温暖化の影響により大気全体の温度（北半球層厚換算温度）は平年より高い値で推移する見込み。このため、日本付近は高温傾向になりやすい。

↑前回と同様。

- ⑦ 太平洋高気圧が強いため、梅雨前線帯では南から湿った気流が入り込みやすく、前線の活動が活発になると見込む。また、太平洋高気圧の北への張り出しが強い傾向（④を考慮）から、太平洋高気圧の勢力が最も強い盛夏期は北～西日本では高気圧に覆われ少雨多照傾向を見込む。一方、沖縄・奄美では、太平洋高気圧の縁辺を回る湿った気流の影響を受ける時期もあるため平年並の天候を見込

む。

↑前回と同様。

- ⑧ 以上から、気温は大気全体の高温傾向及び偏西風が北偏することから日本付近は暖かい空気に覆われやすいため、全国的に高温を見込む。また、チベット高気圧の日本付近への張り出しが強いこと、盛夏期に高気圧に覆われやすいことも高温に寄与する。梅雨時期は、梅雨前線が活発なことから、全国的に若干の多雨傾向を見込む。その後は、北～西日本では太平洋高気圧に覆われ少雨多照傾向、沖縄・奄美では南からの湿った気流の影響を受ける時期もあるため、平年並の天候を見込む。

↑前回と同様。

2. 予報

- ・ 前回と予報根拠に大きな違いはないので、2月24日に発表した暖候期予報の内容は変更しない（修正発表は行わない）。

この資料は、気象事業者等が、気象庁の提供する季節予報の根拠を理解するための補助資料であり、そのままの形で一般に提供することを想定して作成したものではありません。